

鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編

『古代山国の交通と社会』

八木書店 二〇一三・六刊

A5 四〇八頁 八〇〇〇円

本書は、二〇一一年に明治大学で開かれた古代交通研究会の第一六回大会における報告をもとにした論文集である。「山国」を題材とした研究の意義や課題は鈴木靖民の「序」と加藤友康の「あとがき」に譲るが、厳しい自然環境にあり閉鎖的なイメージの山国にこそ、有機的な交通体系が形成されることが本書からみとれる。以下、敬称・論文タイトルは略し、本書の内容を簡単にまとめしておく。

「I 総論」において、吉村武彦はヤマト王権の統治原理が山海の支配により示されることを明らかにする。鐘江宏之は東山道設置の目的を、天武天皇と密接な関係にある美濃・信濃への経路確保に求める。川尻秋生は、越後守橋為仲の下向・上京に日本海交通と信濃経由の東山道ルートが使われたことを指摘する。西別府元日はトントン古道跡の調査結果を紹介する。木本雅康は下野国芳賀郡と塩屋郡との境界の「將軍道」が東山道駅路であったと指摘する。

「II 交通の諸相」では、大隅清陽が相模国から甲斐国への評の編入や甲斐国府による駅の設置を描く。中村太一は播磨や美作の河川交通や出羽の水駅、石山寺造営時の材木運漕を論じる。永田

英明は九世紀以降に駅子以外からの労働力調達や財源充当が行われることを指摘する。平野修は甲斐国の製塩土器搬入ルートと再加工について記している。近江俊秀は大和・河内間の峠道が重要度により変遷することを指摘する。鈴木景二は峠の語源や古代の峠路の呼称、境界祭祀について論じる。松井一明は北遠地域の交通路と宗教・窯業・山城との関係を描く。佐々木虔一は更級日記から東海道の坂・関・富士山を考察する。

「III 生業と信仰」では、小笠原好彦が石山寺造営時の木材採取から車や筏による運送までを検証する。傳田伊史は河内や信濃が朝鮮半島との往来を通じて馬の飼育文化を受容する様子を描く。山路直充は瓦当文様の伝播から情報伝達や物流について論じる。高島英之は群馬県の楡木II遺跡の墨書土器を分析する。黒済和彦は蔵手刀の様式からその流通の様相を論じる。

「IV 山国の「政治学」」において、荒井秀規は甲斐国が駿河經由の利便性から東海道となったものの、それ以外の交通路も走っていたと述べる。館野和己は、越前が交通の難渋さゆえに北陸道以外の陸・海路を使い分けたことを指摘する。濱修は、東国や北陸からの運送拠点である朝妻湊と塩津湊について、起請札や津刀禰を題材に描く。中大輔は壬申紀の伊賀駅家の所在地を比定し、「原初東山道」が伊賀を通過したことを指摘する。根本靖は東山道武蔵路の発掘調査成果について述べる。居駒永幸は峠や坂が別れの間でもあることを文学から検証する。以上の論考の他、中村太一が作成した駅家と駅路の地図も非常に有用である。

近年、交通史研究の進展はめざましく、山国というテーマに挑

んだ本書も今後の研究を新たな方向へ導くものとして意義深い。本書の論考に共通するのは、山に囲まれた環境が必ずしもマイナス方向に作用するとは限らず、むしろその条件を活かした活発な交流が生まれたとする前向きかつ斬新な考え方である。こうした個性的な着眼点や生産的な議論が、今後の交通史研究をさらに発展させていくように思う。様々な分野の研究者に読んでいただきたい書である。

(宮川麻紀)